

## 日蓮聖人の法華經弘通の特質

——「譬喩」を視点として——

龍 門 義 通

日蓮聖人の遺文を拝読するとさまざまな譬喩や説話が散見できる。これは聖人が譬喩や説話を通して法華經の宗教的世界・実践のあり方を説かれたからであろう。

そこで聖人が紹介された「説話」の中から「安足国王の説話」に注目し、聖人がこの説話を通して説示されたことを尋ねてみよう。

この「安足国王の説話」とは『宝物集』に収められており、「子は宝」であるということを説いている。その内容は、安足国王は名馬を得るために行商人を馬の姿に変えてしまった。しかし、父の帰りが遅いことを案じた子は、旅に出て父を見つけたし、もとの人間の姿にもどすことができた、という話である(1)。

この説話は、『千日尼御返事』に紹介されており(2)、阿仏房の遺子藤九郎守綱が父の供養のために、佐渡より身延へ聖人を尋ね来たことに譬えられている。そして藤

九郎の孝養を「子にすぎたる財なし(3)」と賛嘆されている。

ところで、この「子にすぎたる財なし。」との聖人の説示は、夫に先立たれた千日尼にとっては、これからの藤九郎との生活の上で、どんなに力強い励ましの言葉として思えたであろう。また、藤九郎には聖人が藤九郎に母への孝養をうながす言葉として聞えたであろう。そして、この説話の子の孝養によって人間の姿にもどることのできたとの聖人の説示は、父阿仏房の靈山浄土への往詣と成仏として信受したと推察できる。

聖人はこの手紙の多くを「安足国王の説話」を示されており(4)、聖人の説示は『宝物集』よりもはるかに具體的なものとなっている。そして聖人の説示は単に説話の紹介ではなく、聖人の内面において完全に消化され、聖人の法華經的世界と一体化している。また、この手紙を受け取った千日尼と藤九郎は、これを「説話」としてでなく自身の出来として受けとめ、そこに聖人の語られた意図を十分に汲み取ったと推察できる。

このように『千日尼御返事』において「安足国王の説話」を考へることにより、聖人の千日尼と藤九郎への関わりと、死者である阿仏房の靈山浄土への往詣と成仏に

ついで見ることができると。

以上のように、聖人が用いられた譬喩や説話には、譬喩や説話の持つ意味をこえた宗教的な深い意味がうかがえるのである。

〔註〕

- (1) 『大日本仏教全書』第一四七巻所収の『宝物集』による。
- (2) 『昭和定本日蓮聖人遺文』一七五九—一七六五頁
- (3) 右同書 一七六五頁
- (4) 全三三紙の内、五紙を費やされている。

## 日蓮聖人自筆書状の 料紙使用法について

寺 尾 英 智

日蓮聖人の書状は、一紙のものから二十紙以上にわたるものまで、長短様々なものが残されている。これらの大部分は檀越に宛られたものであり、聖人の布教活動における書状のもつ重要性は、既に指摘されている通りで

ある。

ところで、聖人の書状がどの様に認められ、どの様な形をもっていたか、その形態的面については、従来あまり明らかにはされてはいない。しかし、遺文の文献学的研究を進める場合、その基礎的作業として真蹟遺文が本来どの様な形態であったかは明らかにされる必要があると考えられる。そこで本発表においては、古文書学的視点から真蹟書状の形態について、特に料紙の折り方、封等について二・三の事例の検討を行ないたい。

まず、比較的事例の多い二紙の書状についてみると、『日蓮聖人真蹟集成』等により十四通をあげることが出来る。このうち切封墨引・上書の確認されるもの四通、上書の確認されるもの一通があり、位置はいずれも第二紙奥である。

ところで、一般に二紙の書状の場合には、本文の記されていない面を背中合わせにして、一紙奥から折りたまれて封・上書が加えられ、これを開くと封・上書は二紙奥に位置することが知られている。聖人の書状の場合にも同位置に封・上書が検出されるのであるが、更に「観心本尊抄副状」修理の過程で折目跡が発見され、上述の場合と同一に折りたまたまれていることが明らかにな